

35 馬の丞

豊臣秀吉が天下を取ったとき、土地を測量してばっちり年貢を取ることにした。太閤検地つて
ういんや。

西袋には、伊東丹後守がやってきた。村総代の馬の丞はいうた。

「私が小縄で前もって畑や田んぼ一枚一枚測っておきました。西袋は六百石の米のとれる土地
でいびやいます。」と。

丹後の守は、「いや、なっと見たところ八百石以上ある。八百石でゆるこいやらう。」と
うた。「そんな無茶な。うこも承知できません。」と、馬の丞はゆずりた。「そんなら測るぞ。よい
か。もし八百石以上あったらお前の首をもむいぞ。」はら、やういびやります。「と、返事した。

すると、丹後守は山にのぼって大縄で道も川も全部ひくくめて測ってしもた。「おい、千
二百石もあったぞ。」とてうて、馬の丞の首を切つてもた。

それから明治になるまでの二百七十年間も、西袋はありもせん土地にまで年貢かけられて、ひ

でう困つたんやと。

ある年、見かねた鯖江の殿様が、年貢を少し軽くするよう申し渡したほどやった。馬の丞もあ
の世ですこしは浮かばれたやろか。

36 河和田にも弁慶が

もう八百二十年ほど昔のこと。頼朝に追われた義経と弁慶らは、北陸道を奥州平泉へ落ちて行
くんやが、その途中、この河和田にも来たんやと。

まず西袋まで来ると、熊野の大神が急に現れなさつて、山の中の大きな岩穴につれていって下
さつたと。人が五・六人入れる穴で、「弁慶のかくれ岩」っていうんや。この岩の下に、もう一
つ大きい岩があつて、岩の上に弁慶の足の跡と、馬のひづめの跡がのこつてゐるんやと。

椿坂には、山の中に「流し」ってうて、ひらいた岩がある。その岩の上のうてゐるのが、



「弁慶の足跡」やと。

清水町の谷川にも大きい岩があつての。そこには
弁慶が馬に乗って跳んだときついたひずめの穴が、一
つくつきり残ってるんやと。

尾花の山では、水源になつてるあたりに大きい岩が
多くての。そんな中で目立つのが「なた岩」や。弁慶がなたを落としたんで、割れたそつな。

三社森では、戦の相談をしたんやと。

そして河内の的岩や。まるい大岩が二つ並んでいる。向かいの山の
清根坂から弁慶がこの岩を的にして弓をひいたんや。表面がゴツゴツ
してるのは、矢のあたった跡やと。

どれもこれも弁慶の話はこつ快やのお。



37 庄屋のやべさま

江戸時代、西袋に代々弥兵衛という庄屋があつたんや。本宅のまわりには米蔵や酒蔵が建ち並
んでいて、プーンとお酒のいい匂いがたちこめていた。門の前の出道は米蔵に米を運びこむの
に、どの村道よりも広くなつていた。

西袋は河和田じゅうで一番大きい村や。弥兵衛さまには鯖江藩の米を入れる米蔵まであつた。
田植えが終わると、秋の稲の刈り取りまでの長い間、村の元気な男たちは漆掻きに東北や関東ま
でも出かけていった。採った漆が売れるまで現金は手に入らなかつたから、旅立つときは弥兵衛
さまにお金を借りて出かけたもんや。

江戸時代も後半になると、ごこのお殿様もたいていは借金をかかえて大変やつた。一年おきに
参勤交代つて言うて、お供を従えて江戸まで行かなあかなんだ。しかたなしに金貸しから借金し
たり、農民に沢山の米を収めさせたんやと。時には、金持ちの町人や庄屋に寄付させていたんや
と。